

理系の視点からみた「考古学」の論争点

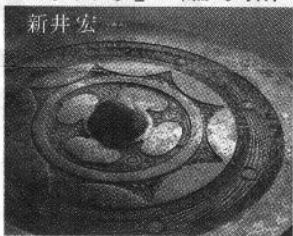
ビジネスマンのなかにも、歴史や考古学にくわしい人はおおぜいいる。話しあって、その博覧ぶりにおどろかされることも、すくなくない。こや、なかには、興味がこうじて、そちら方面の論文を書きよつになつた人さえいる。著者も、そのうちのひとりである。

独自の解釈、議論ぶつける

数多くてがけるプロになつている。
もともとは、理系の人である。考古学界のしがらみには、毒されてない。それで、自分の判断を、学閥や既存の権威筋にとらわれず、すなおにぶつけていた。
どの議論も、ややむずかしいが、おもしろい。私はなかでも、古墳時代の尺度論に感心した。これは、尺度だけにとどまらず、東アジア史をときほぐす展望を秘めていると考える。また、著者の議論が、学界のやや因循なありようをつつしだしている点も、おもしろく読めた。
(井上章一)

『理系の視点からみた「考古学」の論争点』
新井宏著

理系の視点からみた「考古学」の論争点



本 青銅器の由来 鉛の比率が語る

考古学にとっては衝撃の書と言つていい。例えば、弥生時代の青銅器の由来の問題。鉛の同位体(中性子の数が異なる原子)の比率に基づく分析によって、弥生時代中期前半までの青銅器は、時代がかなりさかのぼる中国・商周代(紀元前16世紀、前8世紀)の青銅器と原料が同じであることが分かった。これは何を物語るのか。

中国の中原地方・齊に商周代から

大切に伝えられてきた青銅器が、紀元前284年、燕の將軍、楽毅による略奪によって朝鮮半島にもたらされ、それがリサイクルされる形で日本に流入した。そう著者は考える。
日本に青銅器が本格的に出現するのは、弥生時代前期末から中期初めにかけて。それが鉛同位体比が語るように紀元前284年より新しいといふことになる。近年、国立歴史民俗博物館の研究グループが主張している、弥生時代の始まりを約500年古くする説は成立しにくくなり、むしろ従来の定説に近くなる。
このほか、卑弥呼の鏡とも言われる三角縁神獸鏡や、古代の尺度の問題などについても、緻密なデータに基づいて、説得力のある仮説を提示している。(大和書房、3150円)

新刊

● 理系の視点からみた「考古学」の論争点

新井宏著

古代を探求する考古学はロマンと推理に満ちあふれている。が、データに基づいた科学的推論とは言えない議論も多い。三角縁神獸鏡は魏鏡なのか国産鏡なのか、弥生時代の始まりを五百年もさかのぼらせた炭素14法による年代測定は正しいのか? 金属エンジニアとして金属考古学の誤りを指摘してきた著者は、主観を排除した実証データ主義の方法論で従来の説を批判的に吟味していく。(大和書房・三一五〇円)